

〈書評〉

村井まや子編 御茶の水書房

『ジェンダー・ポリティクスを読む―表象と実践のあいだ』

中園成生（平戸市生月町博物館・島の館）

こんにちのジェンダーのあり方は、例え同じ国家に属していても、基盤とする社会のあり方により多様な展開がみられる。評者が居住する長崎県平戸市生月島は、昭和初期以降、遠洋まき網漁業を基幹産業とするが、まき網船乗組員は男性のみで編成され、婦人は家を守るという役割意識が長く続いてきた。昭和40年代には、北海道沖など優良漁場への出漁により乗組員の給料が首都圏の大卒会社員を遙かに越える高給に達したこともあって、婦人労働の必要性が減じ専業主婦化が進む。しかし平成に入ると漁獲量の減少と国の減船政策によって、現存のまき網船団数は6と、盛期の3分の1程度となった。漁業収入も減少したため婦人の就労も再活発化し、それに伴い婦人（特に稼ぎ手であるヨメ）の発言力も強くなっている。尤も以前から、年間の殆どを洋上で過ごす男性に比べ、家や地域に対する婦人の主体性は強いものがあり、見かけの様相のみでは理解し難い部分もある。例えば生月島に現存するかくれキリシタン信仰で、直接行事に携わるのは男性だが、料理などの準備を行う婦人の意向が、行事や組織の存廃に大きく影響している現状が認められる。

本書に掲載された諸論文は、こんにちのジェンダー研究の多様な側面を紹介している。第1部「ジェンダーとイメージ」においては、近世以前、近代、現代におけるジェンダー・イメージの諸側面が紹介されている。金貞我さんの「美人図のイコノロジー」は、朝鮮半島における、貞節を守り大義に殉じた「烈女」の図像において露出した乳房が描かれる点に注目し、それは普遍的な母性神の系譜に連なりながら、儒教的女性のイメージを反映して形作られたものだとする。中野明さんが

近著（『裸はいつから恥ずかしくなったか』）で論じているように、日本においては、幕末以前には乳房を含む女性の裸体は開かれた日常的な風景の一部だったが、明治以降、裸体を隠すものであると同時に（と言うか隠したが故に）エロスの対象物とした欧米人の影響を受けて裸体観の変化が起きる。朝鮮半島の図像においても、階層や時代による裸体観の差違や変化を捉えておく必要があるが、特に19世紀末～20世紀初頭の乳房を露出した女性表現については、伝統的側面と共に、（芸術的な価値付けも含めた）欧米的な裸体観の影響を想定する必要はあるだろう。小松原由理さんの「ジェンダー・イメージが展開する場所」は、第一次大戦後のドイツで興隆した文化芸術活動ダダにおいて、どのように男女が表現されたかについて紹介しているが、そこに表現されたイメージは、制作に携わった男女の関係性に大きく影響されている事が見てとれる。笠間千浪さんの「ひとつでない男の性／身体」では、ジェンダー・イメージの歴史的変容が的確に概観されており、特に近現代における「ジェンダー化への抗い」の事例として、女性作家が著した性の入れ替わりを題材とした物語をいくつかあげる。それらは確かに構造的には「抗い」の体をなすものなのだが、性的対象の意識を想像し同化する事も欲情を昂進させる効果があり、そうした倒錯的エロスの装置の域を越え、どこまで抗いの主張たりえるのかという疑問はある。村井まや子さんの「おとぎ話とジェンダー」は、おとぎ話として幼少期から呈示されてきた男女のあり方を考察しつつ、それを分析しイメージ的に覆そうとする現代美術の試みを紹介する。

第2部「ジェンダーと社会運動」の冒頭、山口ヨシ子さんの「ジェイン・アダムスのセトルメント活動における人種問題」では、シカゴに開設したセトルメント、ハルハウスの活動に携わった女性達が内在させていた人種的偏見の影響について述べる。それは女性社会活動の揺籃期における一つの状況として検証されるものだが、こんにちにおいても、ある活動が主張を先鋭化させる過程で、他の要素が看過されたり無視されるといった構図は存在し、問題の普遍性を感じる。河上婦志子さんの「女性だけの組織「オンタリオ女性教師協会連合」」は、カナダ・トロントに発生した女性教師の地位向上のための組織の活動史だが、興味を持ったのは、「マリッジ・バー」と呼ばれる結婚退職制度がかつて存在し、それによって高いスキルとモチベーションを持った比較的高年齢の独身教師層と、スキルが低い腰掛け程度の意識の若い教師層が発生し、両者間で意識の断絶が生じていた事である。同様の状況は現代日本の社会においても認められ、真の女性参画社会を目指す上

で重要な克服課題でもある。顧燕翎さんの「婦女新知の時代」は、1980年代の台湾で「婦女新知」という集団によって進められたフェミニズム運動についての報告である。政治的な取り組みにおいて時に現実的な妥協も図りつつ、墮胎の合法化や民法親族編の改定などの成果を上げたが、なお伝統的な男性優位の痕跡を残す状況だという。台湾は、客家人、閩南人、外省人、原住民、越南人（東南アジア系移民）など出自や本来の言語を異にする人々からなる複合社会的側面も有しており、ジェンダーや家に対する意識にも多様性があるように思えるが、それがフェミニズムの進展に影響を与えているのか気になる。

本書の諸論文が扱うテーマは、一見、日常社会から遠いものに見えるが、それぞれの中で考察された内容は、例えば私が住む地域において、日々感じているジェンダーのあり方とも結びつけて理解できるものだった。ジェンダーの地平の広がりと共に、その根の張り具合を感じさせてくれた本である。